文化

表現の力 信じる矜持

中国文学研究者 藤井さん最終講義

最終講義を終え、花束を受け取る東大教授の藤井省三さん ＝東京都文京区の東大本郷キャンパス

多くの出会いで視野広げる

中国文学研究者の藤井省三さんが、3月末日に東大教授の定年を迎えるのを前に「魯迅と現代東アジア文学史」と題して最終講義を行った。「魯迅が好きだった少年が、30年、40年かけて東アジアを視野に入れた文学史を構想するに至るまでを振り返りたい」。ユーモアを交えながらの語り に、同僚や教え子、編集者や作家ら約250人が熱心に耳を傾けた。

1952年東京生まれ。「アイデンティティーの危機」にある10代、中国では文化大革命が起きていた。「家庭や学校への反発から、文化大革命への共感にスッとつながった」。高校時代には竹内好の著作や竹内訳の魯迅作品をむさぼり読む。「研究をするようになってから竹内さんの魯迅の作品評をみると、随分あらっぽいものだったと分かる。でもその単純明快さは高校生には理解しやすかった」

72年、東大に入学。卒論指導教官は魯迅研究で知られる丸山昇さんだったが、魯迅ではなく蘇曼殊の小説について書いた。

修士課程の頃に名誉教授だった小野忍に出会い、言われた。「中国だけ見ていちゃ駄目です。世界に視野を広げなさい」。教授だった前野直彬さんからは、一人の作家の全作品を年代順に読むことを教えられ、魯迅全集を買い込んだ。「日記と書簡をもとに、1カ月単位で魯迅が読んだ近代文学を読み、その月に魯迅が発表した作品を読んでいきました」

78年、日中平和友好条約が結ばれ、79年に政府交換留学生として訪中。中国の状況を見て留学生同士で「中国の社会主義にはもう幻想を持てない」と言い合った。「自分の留学が順調じゃなかったので、夏目漱石のロンドン留学に親近感を覚えた」。帰国後、漱石と魯迅を比較研究した。

知り合いの記者に「近代100年を視野に入れるべきだ」と言われて「巴金や鄭義、莫言ら同時代の作家も研究対象として読むようになった」。

89年の天安門事件の際には「中国文学者としてどうしていいか分からなくなった」。そんな時、雑誌「ユリイカ」の編集長から中国文学の特集を組む提案があった。「どう生きればいいか分からないのに、文章なんか書けない」と断ると「そういう時だからこそ書くべきだ」と返された。ユリイカに論考を載せたことで「もう一度、中国文学と向き合う姿勢を持つことができた」。94年、東大教授に。

関心は台湾や香港、シンガポールにまで。東アジアでの村上春樹作品の読まれ方も調べた。国際シンポジウムへの参加・主宰は計100回。多くの出会いの中で、研究者としての地歩を築いた。

「東アジアでも、偏狭なナショナリズムによって偶発的な衝突が拡大する恐れがある。でも文学や映画やドラマによって相手の心情や論理がある程度分かっていれば、武力衝突を止めることができるかもしれない」と藤井さん。文学をはじめとする表現の力を信じようとする言葉に、学者の矜持（きょうじ）と信念がにじんだ。

本の

トーマス・R・H・ヘイブンズ著

長嶋茂雄の公式戦デビュー前日に東京・池袋で生まれた私は、幸せな年時代を過ごしました。零細な鉄くず屋で、姿の人たちにはどう下されてもいました。いわゆる戦後民主主下で、食べるものにたこともありませんでした。

ただ十数年前、ある聞社の依頼でそんな書いていて突然、ショードをたたく手がしました。―俺の幸福実は朝鮮戦争や、ベトナム戦争の〝おかげ〟たんじゃないのかなう思ってしまった

やまがた 期待の工芸家 6

縄文への思い込める

カナチョロが巣穴から顔をのぞかせているランプシェード（幅30センチ、高さ51センチ、奥行き30センチ）

「縄文を語り出すと止まらない」という金寛美さん ＝舟形町長沢

舟形町長沢の舟形若あゆ温泉近くに構えた「薫風窯」で、金寛美さん（41）が縄文時代から使われている陶芸の技法を実演で解説してくれた。粘土をこね、形を作りながら「一日中でもいじっていられる」と金さん。「縄文の人にとって、土器を作ることは表現や、祈りの全てだった」と思いをはせる。

新庄市出身。東北芸術工科大で洋画を学んだ後、もともと興味があった陶芸の世界へ。青森県南部町の南部名久井焼に弟子入りし、2003年、新庄市升形に陶工房を構えた。その後、舟形町に嫁ぎ、10年に薫風窯を開設する。縄文に惹かれ、学び始めたのは、国宝の土偶「縄文の女神」が出土した舟形に住むようになってから。全てではないが、作品にも縄文の要素を取り入れてきた。ポイントとして取り入れる作品もあれば、「縄文七輪」のような「こてこて」（金さん）の作品もある。

縄文土器は食料の煮炊きなどから、「時器」（略）いた分析考えの感じの現の器きたづくる。

金 寛美さん

（陶芸、舟形町）

▽こん・ひろみさんは1977年、新庄市出身。98年に東北芸術工科大美術科洋画コースを卒業後、青森県の南部名久井焼で陶芸を始める。2003年、新庄市升形に陶工房を設立。10年から舟形町長沢に「薫風窯」を構え、作陶している。